

# 沼津市若山牧水記念館

第17號

1996.12.15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会  
〒410 沼津市千本郷林1907-11

TEL (0559) 62-0424  
FAX (0559) 62-0424

## しら鳥はかなしからずやそらの青 海をあをにもそまらずただよふ

若山牧水の初期の作品で、「幾山河の歌」とともに最も広く知られた歌である。第一歌集『海の聲』に発表され、更に出世歌集の第三歌集『別離』によって世に知られ、時の青年達に喝采をもって迎えられた歌のひとつであった。

昔間では、この作品は房総半島の南端の根本の海岸での作と伝えられた。歌集『海の聲』ではこの作品の前後に、「ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ海にとられむ」「君かりにかのわだつみに思はれて言ひよられなばいかにしたまふ」が置かれ、これらの作品は恋人園田小枝子とともに根本滞在時の作品であるために、そ



して、「白鳥の歌」の愛を象徴する哀調を帯びた調べの故に、当然根本での愛の賛歌のひとつと理解されたのであろう。「山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君」とも並んで、そう考えても不思議はないが、牧水が根本に遊んだのは明治四十年の暮で四十一年の初めにかけて滞在している。「女ありき、われと共に安房の渚に渡りぬ。われその傍らにありて夜も晝も断えず歌ふ」と『別離』の詞書にあるそのままの歓喜の青春であったし、そんな背景が「白鳥の歌」に相応しいとも言えようか。

しかし、この作品は明治四十年の『新聲』十二月号に発表されているので、根本の作品とは考えられない。しかも、当初『新聲』に発表された時は「しらとり」と詠まれていて、そこからも根本の作品とは異なることがわかる。ただ、歌集に編む時にこの作品を根本の作品群と同じところに置いた牧水の意図は判るような気がする。

ついでだが、この鳥が「はくちよう」か「かもめ」かで論争されたことがあった。発表時のルビによればスワンともなるうか。しかし、いづれにしてもこの作品の良さは漂うような浮遊感だろう。白鳥は海と空の間の模糊とした領域に浮遊する青春の象徴であり、「幾山河の歌」とも共通する「あこがれ」なのだと思われる。

今回、沼津牧水会が入手したこの色紙は、他の幾つかの色紙と違って、文字の配置や、文字そのものもたいへん丁寧に書かれている。清楚とも言うほどの静かな筆の運びに特別な配慮がうかがえるのである。もしかしたら、家の新築資金や「詩歌時代」発刊資金のため一枚八円で書いた揮毫の一枚ではなく、何かのお礼に心を込めて書かれた色紙ではないかという意見もあった。酔筆ともいえるべき踊るような書体と違い、行儀よく並んだ文字に、牧水の新しい面を見いだすような気分である。私はこのように丁寧に、真面目に一心に書かれたこの色紙が好きである。ぜひ、観賞して欲しいと思うのである。なお、近々この色紙をレプリカにしてお頒けする予定と聞く。牧水を愛する方々と共に楽しみたいとも考えている。(須永秀生)

第43回沼津牧水祭

短歌大会

千本プラザ・音楽ホール  
平成八年十月十三日(日)

牧水の第一号歌碑「幾山河」に近い千本プラザを会場として、第四十三回沼津牧水祭「短歌大会」が開催された。参加者百五十名、投稿歌数二百六十一首、お招きした選者は、「りとむ」の三枝昂之氏(川崎市在住、昭和十九年山梨県生)。

午前の部は、選者による講演会。早稲田大学の先輩で沼津市柳沢の妙蓮寺住職だった歌人福島泰樹氏との交友のエピソードが語られ、現代短歌界の特質や高齢化問題が話題としてとりあげられた。午後の部は、

応募短歌の一首一首についての丁寧な講評があり、参加者は、なごやかな雰囲気の中で満足気でした。



選者賞

栄耀の裏側のやうな手ざはりに枇杷一顆刻く枇杷の木の下  
清水市 久保田たか子

牧水賞二席  
お見せする物はなんにも無い家の自慢は窓の大き落日  
沼津市 石川 つや子

牧水賞三席  
峡の田に一人田草を取る吾に風は時折人声はこぼ  
大仁町 山中さち子

選者賞

初生りの無花果の実の色付きぬ二人暮らしの漸く慣れて  
われは今いかなる顔にゐるならむ方便の嘘ひとつ言ひたる  
老人の独り住む家の賑はひて子のシャツ揺れる旧盆の庭  
病篤き子の書物よりこぼれ落ちてうら若き女性の写真一枚  
人間が歩き犬が猫が歩きひとりしずかのムラサキの路地  
思い述べ移動削除のいくたびかワープロ画面にうたは生まるる  
草のあく滲みたる指を氣にしつつ古典講座の席にわが居り  
互選賞(一位から二十位までの二十二首)

ピアッセし少年の大工らはつらつと長き角材担ぎゆきたり

峡の田に一人田草を取る吾に風は時折人声はこぼ

言ひたきこと堪へるに馴るるかこの夕べ乾反る昆布をびしびしと折る

思ふこと言ひ得ぬいらだち身障の子は手を胸に我をみつむる

われは今いかなる顔にゐるならむ方便の嘘ひとつ言ひたる

一人子が共に暮らさず嫁ぐとふ離れゆく舟繋ぐ杭なし

誇りもち逝きたきものと願いつつ九十一歳今日の息する

切れさうで切れない絆寄り添ひて夏の夜に食む固めのパスタ

草のあく滲みたる指を氣にしつつ古典講座の席にわが居り

駅前道の段差を探りつつ盲目し夫婦バスに向かへり

膝にきて見上ぐる孫の瞳のすずし如何なる未来この子らを待つ

残り蚊が訪いくれしさいえいとおしく行方見守る真夜の病室

走り去る電車が瞬時真夏日の光さへぎり遮断機上がる

お見せする物はなんにも無い家の自慢は窓の大き落日

初めてのひまご抱きたる我が胸に赤子の鼓動が微か伝わる

汗垂りて墓地の雑草引きみたり父はは見ませわれも老いたり

たんぼぼの穂絮の作る小宇宙幼の息に散りて旅だつ

農家にてはくらしのたたぬ日々なれど外に能なし地下足袋をはく

背を丸め徘徊の母へカナカナと包むが如きひぐらしの声

稲つくり子に任せて育ちゆく稲田の色を遠くたしかむ

鉢巻きのうら若き娘ら打ち鳴らす祭り太鼓に夏がはじける

老人の独り住む家の賑はひて子のシャツ揺れる旧盆の庭

- |      |       |    |
|------|-------|----|
| 清水町  | 伊勢    | 幸子 |
| 沼津市  | 桜井    | 光子 |
| 伊東市  | 石井    | 礼子 |
| 島田市  | 加藤    | 江美 |
| 沼津市  | 須永    | 秀生 |
| 御殿場市 | 橋都    | 道子 |
| 富士宮市 | 小松    | 和子 |
| 沼津市  | 柴田    | 昌明 |
| 大仁町  | 山中さち子 |    |
| 平塚市  | 香川    | 敏子 |
| 大仁町  | 室伏    | 侑  |
| 沼津市  | 桜井    | 光子 |
| 静岡市  | 三枝    | 理作 |
| 御殿場市 | 菅沼    | 高嶋 |
| 沼津市  | 林     | 和  |
| 富士宮市 | 小松    | 和子 |
| 沼津市  | 佐藤    | 光敏 |
| 沼津市  | 石塚    | 哲  |
| 静岡市  | 橘     | 初枝 |
| 修善寺町 | 森嶋八重子 |    |
| 沼津市  | 石川つや子 |    |
| 沼津市  | 市川    | やす |
| 静岡市  | 佐々木房子 |    |
| 御殿場市 | 土屋さち子 |    |
| 修善寺町 | 室住    | みや |
| 富士宮市 | 細貝    | 伸子 |
| 土肥町  | 鍵山    | たみ |
| 沼津市  | 前田千枝子 |    |
| 伊東市  | 石井    | 礼子 |

# 第七回

## 中学生短歌コンクール

平成八年度第七回「中学生短歌コンクール」に応募した若人は、千五百五十六名でした。このコンクールがスタートした平成二年度の第一回目は百二十七名、第二回が三百名、第四回が四百名と参加者は年々増え、昨年はついに千四十名。ご指導くださる先生方の力に支えられて、この催しは立派に成長しました。沼津の若人たちが清らかな青春時代の感性や想い出を、短歌という短詩型で表現する楽しさを見つけてくれたらと思います。遠くは南の牧水生誕地宮崎県東郷町、北は青森県五所川原市の若人たち、そして名古屋市の宮中学校の生徒たちのように、全校をあげて長い年月短歌に取り組んでいるケースもあります。

今回のコンクールは、沼津市若山牧水記念館の開館十周年という区切りの年にあたります。若人たちの短歌が質・量ともに開館記念の華と咲き、薫ってくれることを期待しています。

今回の特選歌は、次の十一首です。その表彰は、十月二十七日沼津牧水祭碑前祭の会場(千本浜公園)で行われました。

へなお、選者は上田治史、須永秀生、川口和子、青木朝子の四氏。

戦争をやる理由などあるだろうか流してきたのは  
 たくさんのおみだ 第二中 一木 文彦  
 ころがったケシゴム拾い上げるのもなんだかだる  
 い梅雨の午後 第二中 佐々木晶子

手の下で花のように咲き乱れる夏の終わりのせんこう花火 第三中 鎌内 貴子

包丁の快い音母の音ふとんの中で聞いて目覚める 第五中 加藤 優美

第五中 加藤 優美

仕事場に茂貴来たかと祖父の声となりと並んで背比べする 第五中 影山 茂貴

第五中 深瀬 茜

いい天気このままずっとねてたいなつゆの晴れ間の心地よい朝 第五中 深瀬 茜

第五中 伏見 雅子

先ばいと声をかけられふりむいてどきどきしている二年の私 第五中 伏見 雅子

片浜中 工藤 智子

風がふく犬の毛つかむと毛がぬけるもう暑い夏近づいている 片浜中 工藤 智子

大岡中 岩本 充恵

七夕の星座観察時流れ東の空のベガ、アルタイル 大岡中 青木 宏美

大岡中 高崎めぐみ

### 作品を拝見して

川口和子

応募された多くの短歌を見せていただき、それだけの歌から、若々しさと一生懸命さが立ちのぼって

来て、入選歌を選ぶのに苦心しました。そこで、私は、社会のことや身のまわりの出来事、家族や学友のこと、移りゆく季節の風物などを自分自身の感覚

で受け止め、自分らしい思いを歌にしたものを選ぶことにしました。

言い古された表現でなく、内容に合った表現で作

られた歌が、光って見えました。

・仕事場に茂貴来たかと祖父の声となりと並んで背比べする

茂貴くんと祖父の背くらべという事を歌ったのが、个性的だし「茂貴来たか」という声が生きたと、その場の様子を

描いてムダがなく、

キリッとしたよい歌

・風がふく犬の毛つかむと毛がぬけるもう暑い夏が近づいている

犬の毛が抜け易くなったという事実が夏の近いのを感じたと、自分の感覚を大切に歌に作ったのが、

大変に味わい深く、読む人の心に感動をよびます。

・先ばいと声をかけられふりむいてどきどきしている二年の私

「先輩」なんてオジクくさい呼び方で自分が言われるなんて、さぞびつくりした事でしょう。しかも身近な下級生から。そのとまどいが、しっかり歌にまとめられました。一瞬の心の動きが面白いと思えました。

三十一文字の定型の枠にはめ込んで歌を作る事は、むずかしい反面、作り易く親しめることです。今でなければ感じないこと、今でなければ作れない歌を、瑞々しく歌ってください。(沼津牧水会理事)



## 上田治史氏を悼む

青木朝子

(沼津牧水会理事)

ありし日の  
上田 治史氏

前日の雨とは打って変わったやわらかい晩秋の陽ざしが注ぐ十月二十七日、第四十三回沼津牧水祭前祭当日の午後三時十二分、社団法人沼津牧水会の理事であり初代事務局長をつとめられた上田治史氏は、忽然と幽界へ発たれました。

思えば、昭和五十六年五月「沼津牧水記念館建設発起人会」が結成され、十月から募金活動がはじまりましたが、折しも経済不況に見舞われるなど幾多の困難に遭遇しました。そんな中で上田氏は、現理事長の林茂樹氏、故田中旭氏らと共に常にその活動の中心となり初志を貫徹され、ついに昭和六十二年十一月一日開館の運びとなったのです。沼津市若山牧水記念館の開館と同時に事務局長兼副館長に就任、自らワープロを駆使して事務体勢を軌道にのせ、講演会の講師を精力的につとめられるなど、記念館を内外へ披露すべくその活躍ぶりには目をみはるものがありました。

時あたかも記念館開館十周年を来年に控えたい

ま、功績の大きかった上田氏をはじめ寺田桂子さんらに出席頂いて、にぎやかに十周年を祝いたいと理事長が熱を込めて話されていた矢先の逝去だけに口惜しくなりません。

歌人としての氏は、県歌壇の巨星として長い間輝いて来ました。静岡県歌人協会の創立より関与され、現在副会長兼事務局長の任にあり、高嶋健一会長を補佐し、協会の充実に力を注がれて参りました。上田氏の歌への思い入れは殊のほか強く、「深読みの上田」と自認されるほど一首一首について歌評のほりさげは尽きることを知らず人々を酔わせたものでした。殊に晩年は短歌だけでなく広く文学講座の講師を随所でつとめられ、王朝文学に寄せる思いは深くその熱い語り口は多くの受講者を魅了して来ました。深い思索と感覚の鋭敏さ、豊かな情感を特質としながらも、そこはかとなく男の孤愁をにじませておられた氏にとつて——

——最期まで現役として輝いて忽然と去る——それは自らの美学の成就以外の何ものでもなかったのかも知れません。

六月の檜の大樹は明るくて  
茫々とわが夕ぐれ  
長し

季節風凪ぎて静かになりし夜をうつつとし  
て聞く遠き海鳴り

(歌集『無明記』より)  
昼過ぎてなまあたかき雨となり瓶に余剰の  
もの溢れぬつ

今や故郷なしまさに竹垣の先裏返しに乾きゆ  
く足袋

みづからの傷にくすりを塗りながらはつなつ  
はつか泡だちてゐる

水無月の夜半の三日月みづみづとさみしかり  
せば酒飲みに立つ

(歌集『流燈記』より)

氏は、四十余年の歳月をかけて牧水顕彰に力をそそがれ、昭和六十年には牧水にとりつかれたかのように駿河新書に「若山牧水」を著し、来年初次発行予定の至文堂「国文学 解釈と鑑賞」の牧水特集号に、牧水の「書簡」と歌集「溪谷集」を担当されました。それが遺稿となったという。牧水との浅からぬ縁を改めて思うばかりです。

因みに、私が上田氏と御縁を頂いたその出逢いは、昭和三十五年秋の香貫山歌碑前における第七回沼津牧水祭前祭での折と記憶しています。常に先を歩まれる後ろ姿を指標としての三十六年の歳月でした。

あまりの急逝に、埋め難い空洞を抱えたまま立ち迷いながらも、時に立ち止まり振り返っては授けてくださった多くのご教示を大切にこれからの日々を生かすことをいまは願っています。

「文芸静岡」の最新号に掲載された氏の次の作品は辞世の歌かとも思われ、訣れの予感があったのかと胸をつかれます。

意識確かなうちに訣れを告げたき人おもえば  
よにんごにん尊き

天心院詠道日治居士 ご冥福を心より祈り上げ  
ます

合掌